

無新聞

発行 京都学園高校
 新聞社 新明也
 北山 光良
 重目 黒哲也
 目黒 惇太郎

論教育にかきおせ

他校との無常観について比較

二〇一五年二月一七日に、視聴覚教室にて、奈良女子大附属中等教育学校と岡山県立岡山城東高等学校の授業動画を鑑賞した。『平家物語』を共通教材に、岡山の高校では『神様』、『神様2011』、奈良の高校では現代のCMを使いながら無常観とはどういうものか考察していた。

京都学園高校では、無常観について、この世は変わり続けているが、良いこともあると考えたが、他校では、東日本大震災を通じて、震災が起こったことによつて、同じ状態が続かないはかなさを感じると捉えていた。一言で「無常観」と言つても、学校によつて掛け合わせる教材が異なることで、テーマによつて違った「無常観」を読み取ることができた。

それぞれの学校の授業を知ることで、たくさん新しい考え方に触れることができ、また自分たちの考えもさ

らに深めることはできなかった。

従来の授業の場合、一人で全てを考えて、一人で答えを出すというスタイルであるが、このプロジェクトの場合、各自の考えや意見をグループのみんなと共有し、それぞれの意見を聞く中で、いくつもの答えや考えが出ることで、自分自身の見方も変わり、そこから新しいアイデアが生まれるようになった。このような授業を通じて、他の人と意見を共有し考えを深め、新しい答えを見つけ出す力が養われていると実感している。中

学生までに培った発言力や、自身の考えをうまく伝えられるようトレーニングになったといえる。この授業に積極的に参加してきた重



京都学園高校 図書館にて、一面記事を作成す

光良明氏は「どうすれば、明確に相手に考えを伝えることができるのか、相手のことを考えているのか、どうすれば周囲の心を動かす表現ができるのか、毎時間の授業を重ねることに、少しずつステップアップできた。」と語った。

三校が同時にコラボして行った生徒は、「普段は一つの学校で授業をすれば、一つの視野でしか物事を見ていないが、三校の授業をシェアすることで、より多くの意見を交換できたり、離れているからこそ、全く違った考えを知ることができた。同じ教材でも、授業方法が違ったり授業内容も異なったりすることで、よりたくさん価値観や考え方がみつけられると思う。」と話していた。

「今」を生きるユウレイ

日本で広く知られている古典文学の一つに『平家物語』がある。平家の滅亡を時代背景として、一つの時代の終焉に生きる人間の様々な生き様や心のありようを描いている。平家物語は「転換期の文学」と言われている。悪い行いをしてきた平家を源氏が倒すが、源氏までも後に滅亡したため、人々の善因善果という秩序が崩壊してしまつたのである。この秩序の崩壊は転換期が有する本質であり、人々にとつて不可抗力な運命といえる。人間はそのような運命を受け入れるしかないという弱さの反面、それでも生き続ける強さも持ち合わせている。

近年、科学技術が急速に発達している。特にスマートフォンは私たちの生活に密接に関わっている。電話、メールはもちろん、LINE、インターネット等、さまざまな機能で私たちの生活を豊かなものにしていく。スマートフォンを「一体の一部」と考える中高生もいるほどだ。しかし、スマートフォンの普及が私たちに悪影響を及ぼすことがたびたび問題視されている。特に、中高生の使用では、勉強時間が奪われるLINEはじめ、直接的なコミュニケーションの減少などが挙げられる。とはいっても、スマートフォンの恩恵によつて今の生活が成り立って



自己紹介をしつつ、互いの意見交換 (真剣)

「閑さや岩にしみ入る蟬の声」と

いう俳句がある。作者の松尾芭蕉は旅をしている途中に、この句を詠んだのである。芭蕉は地元の人にすめられ山登りを始める。寺につくとそこは静かな別世界で、ただ蟬だけが激しく鳴いている。▼蟬はとも元気で静かさを際立たせるが、それも一瞬のことである。蟬は、はかなく死んでしまう。もちろん人間も同じだ。「長くは続かず、はかない」人生を蟬の生き様は象徴する。そこに私たちは「無常観」を感じずには入れない。▼しかし、その蟬の姿は短い人生の中でも頑張って生きていこうという強さを感じさせる。作家川上弘美さんの著書に『神様2011』がある。震災の後、主人公の「私」が「くま」と散歩する日常を淡々と描く。大きく変わった世の中で、何もすることができない人間が、それでも変わらず毎日生き続ける強さがテーマだ。まるで「わたし」は「蟬」のようだ。▼無常観を感じ取らざるを得ない作品をもう一つ紹介したい。与謝蕪村の「さみだれや大河を前に家二軒」という有名な句だ。「家二軒をどうすることもできなくてそれでも五月雨が降り続けている。この自然における現象は誰にも止められないことができない」ここには大きな自然と懸命に向き合う人間の姿が現れる。▼どんなに起きないで欲しいと願つても、災害は起きてしまうものなのだ。人は自然にあらがうことは出来ない。しかし、どんなに科学技術が進歩しても、自然のすべてを知るといふことは不可能である。それをすべて受け止め、「つらく」「やるせない」日常を、私たちは精一杯生き続けているのである。

いるのは事実であり、現代人は科学技術が発達していない、スマートフォンが開発される前の時代に戻ることはできない。今、目の前にいる人と瞬時に連絡が取り合えるなど数十年前に生きた人々にとってははれまでの秩序が崩壊する出来事であるはずだ。現代社会は刻々と移り変わっている。この瞬間にも新しい技術の開発が行われ、新しい発見を繰り返している。私たちは毎日、時代の転換期を生きているのだ。たとえ悪い影響を及ぼされたとしてもこの不可抗力な運命を受け入れるしかなく、この運命に逆らうことはできない。一方で、スマートフォンを勉強において有効に活用している中高生も多い。辞書として利用する、メールやチャットで友達に分からないところを質問する等だ。このように、スマートフォンと上手な付き合い方を使い方を考え自分のためになるように使用することで、科学の持ち合わせる弊害に屈することなく生活できる。私たちは不可抗力な運命の中でも、力強く生き続けることができるのだ。人間はいつの時代も不可抗力な運命を生きている。そのうえで『平家物語』は時代の転換期を生きている人間の持つ弱さと強さを説いている。運命に生かされることなく自分のすべきことを思索し、判断することで、運命を力強く生きていきたい。

「あのこと」で変わった周囲と変わらない「わたし」

「あのこと」が起きたことで大きく変わってしまった人々の生活と運命。それでも変わらない「わたし」そんな時に融してきて一匹の「くま」と共に散歩へ行く。次第に本来の自分を出していく。うちとける「くま」。それでも変わらない「わたし」

神様 2011 川上弘美

FUNKY MONKEY BABYS

松

新しい 松が揺る 松が揺る 松の上